

2022年度 東広島市教育委員会主催・広島大学マスタース共催市民講座

## 「小学生のための実践的な将棋講座」実施報告

広島大学マスタース会員 早瀬光司

**本講座の趣旨**：各小学生が将棋を通して「自分で考える」及び「深く考える」ことができるようになることを目指す。

**指導方法**：令和4年8月3日、4日、10日、11日の4回（13時30分～15時）に、4年目となる「小学生のための実践的な将棋講座」を開講した。受講生は、1年生1名、3年生2名、4年生1名、5・6年生各2名（合計8名）で、机四枚を円形に並べ机一つに将棋盤を2枚置いて小学生2名ずつが円形の外側に座り、（日本将棋連盟・五段）早瀬が内側に入って8名に対して順繰りに指して廻る「将棋の多面指し（8枚落ち）」を行った。

**指導結果と考察**：1日目（8月3日）：早瀬からは特に助言をすることなく小学生8名に自由に将棋を指させたところ、早瀬に勝った小学生が3名いたので、その小学生は次局からは6枚落ちで指すことになった。他の子らは相手陣への攻め方を知らないようなので、どのように相手陣を攻めたらよいのかを細かく助言した。

2日目（8月4日）：（6枚落ちの）6年生の子（M君）が早瀬に勝ったので、M君については、次回は4枚落ちで指すことになった。

他の小学生には、正しい答え（最善手）を直接には教えずヒントを出すなどして、「8枚落ちや6枚落ち」でどのようにして相手陣を攻めたらよいのかを各小学生毎に細かく指導した。或る小学生が正しい手を指すと、早瀬は「はい、そうです、これが正解です。」と言って、その着手の意味を説明した。その後、他の子らもその最善手に気付くようになり、その手に気付くとその小学生の顔が急に明るくうれしい顔になっていくのが見て取れた。これは、誰にとっても嬉しい「新しい発見の喜び」に相当する。

3日目（8月10日）：やはり最善手を直接には教えないが、ヒントを出すなどして進め、面白い局面を幾つも経験して小学生達は十分に楽しむことができた。最終的に小学生全員が早瀬に勝つ局面まで進めることができ、小学生はみな喜び、早瀬も大いに喜しかった。ただ、M君は4枚落ちで早瀬に勝つことは出来なかったが、5年生のK君が6枚落ちで早瀬に勝つことができ、4枚落ちに進むことになった。

4日目（8月11日）：早瀬は助言を控えて各自に自由に指させたところ、8枚落ちで早瀬に勝てた子が二人出た。しかし、4枚落ちのM君とK君は早瀬に勝てなかった。M君やK君のような子を、どのようにしたら4枚落ちで早瀬に勝てるように力を伸ばせるかが、早瀬のこれからの課題であるが、勝負がついてから教えることはしているが、対局中に教えた方が良いのかどうか、これはなかなか難しい命題である。

また、今回も相手から取った駒を手に握りこんだり、両手を同時に使って指したり、取った駒を左側に置いたり（右側に置きます）している子がいた。その子らには、「指す時や駒を取る時は自分の利き手だけを使います」とだけ言って促した。

このような注意は小学生の「行儀」に相当する「躰の内容」であるが、将棋を指すという実務・実践の中で行うと、言葉が空（くう）を切ることがなく有効である。  
元気